

争論

事業連合化における独自性を問う

1. 大学生協のユニークな連帯～大学生協東京事業連合の歴史から
亀井 隆
2. 食と地域でオリジナリティを発揮～奈良女子大学生協の取り組み
加藤 由美

小売業界の競争が激化する中、事業連合化を図りスケールメリットを活かすことが生協にとっては重要である。しかし、そこで必ず問われるのが、生活協同組合という特質上、単位生協の独自性をどのように発揮していくのか、ということではないだろうか。すべてを事業連合に委ねてしまうと、他のチェーンストアと差別化ができず、組合員をベースとする「生協らしさ」を薄れさせてしまう可能性もある。

そこで今回は、生協の中でもいち早く事業連合化に取り組んできた大学生協に焦点を当て、大学生協の事業連合化がどのように進められてきたのか、そこに生協らしい連合組織の形成過程があったのか、さらに事業連合化の中でどのように単協の独自性を発揮することができるのかについて議論したいと考えた。大学生協事業連合が設立される背景やその変遷については、学生時代から生協に関わり、大学生協事業連合にて勤務経験をお持ちの亀井隆氏（賀川豊彦記念館松沢資料館常務理事事務長）にお話をうかがった。そのインタビューからは、大学生協が全国に生協を広めるために事業としても運動としても連帯を重視してきた姿勢

が窺える。一方、単協の独自性という観点からは、食堂でオリジナルメニューを維持してきた奈良女子大学生活協同組合の取り組みについて、専務理事の加藤由美氏にお話をいただいた。事業連合の重要性も語っていただきつつ、単協の独自性を維持することの意義や困難、地域内での連携強化の必要性など、事業連合化の中で単協の独自性を目指す上で、示唆に富む内容になっている。

現在、大学生協は事業連合を全国で統一することを目指して、各地域での統合を進めているところであるため、今一度、その歴史を学ぶことで役割や可能性を考えるきっかけになれば幸いである。また、地域生協よりマーケットが限られている大学生協を見ることによって、今後の地域生協の経営や活動に何らかのヒントが得られるのではないだろうか。

（本誌副編集長 青木美紗）